二〇二四年度　《第一回　適性検査型入試》

検査Ⅰ

時間　四十五分

受検上の注意

1．解答用紙に、受検番号・氏名を記入してください。
2．声に出して読んではいけません。
3．解答は、解答用紙の所定のところに記入してください。
　方法を誤ると得点になりません。
4．検査終了後、解答用紙を回収します。

郁文館中学校

問題は次のページからです。

1　次の**文章1**と**文章2**を読んで、あとの問題に答えなさい。

（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。）

文章1

「欲望論」の基本の考えは、一方に客観的な世界があって、一方に欲望をもった生き物がいる、という図式ではなくて、「世界」と「欲望」は、相関的な関係になっている、というものです（欲望相関性）。

あるものの存在や性質は、絶対値をもっていない。それと関係する主体との間で決まってくる。塩は人間には不可欠の栄養素だけど、なめくじにとっては致死（ちし）の物質です。ダイヤモンドは文明人にだけ貴重なものだし、＊道徳律は僧侶（そうりょ）には尊（とうと）いが、マフィアには絵空事です。こんなふうに事物の存在の性格や意味が、それに向き合う人間（主体）との関係によって変化することを、関係が相関的だと言います。

＊カントの哲学（てつがく）は、ものの認識の仕方からはじまります。人間は、いわば写真がものを正確に写せるように対象を正しく認識できるか、という問題設定です。これは＊観念論哲学の伝統的やり方です。

これに対して、私のアイディアは、哲学は、欲望と世界の相関関係からはじまります。かんたんに言うと、人間がリンゴやコップをどう認識するかという場面からではなく、いわば、お母さんと赤ちゃんの関係の場面からはじまる。お腹が空いている、とか不安や不快や＊エロスがあるということ、それを満たすなんらかの可能性があるという「関係」の場面です。

われわれは欲望をもっている。それに応じて、さまざまな対象が存在することになる。これが「欲望相関性」です。たとえば、「この世に食べ物があるので、食べたくなる」と人は考えるかも知れない。でもじつは、われわれ（生き物）にお腹が空くということが起こるので、この世に食べ物というものが「ある」のです。きれいなものを見てステキだという気持ちが動くので、この世に、美しい花や、美しい景色がある。よいものを見て心が動くので、人間性とか芸術というものが存在するのです。

つまり、欲望がなければ世界の意味の秩序（ちつじょ）は形成されない。ただしまた、世界の秩序が形成されてはじめて、われわれは自分の欲望の何であるかを知るのです。これが誰（だれ）でも自分の中から取り出せる、ア「世界像」というものの基本構造です。これを「欲望相関性」という＊概念（がいねん）で呼びます。

（竹田青嗣『中学生からの哲学「超」入門』による）

〔注〕

道徳律――生活する上で守るべき規律のこと。

カント――十八世紀に活躍（かつやく）したドイツの哲学者。

観念論――頭の中で組み立てた考えのこと。

エロス――特定の人に対する愛情のこと。

概念（がいねん）――物事についてのおおまかな理解のこと。

文章2

〔ハタは黄金に光る魚と称されるドラードを一目見るためにガイドのディエゴとアマゾン川を訪れた。〕

ドラードは、じろりと私を見た。そして、ゆっくり向きを変え、下流へと泳ぎ去った。

いた。いたぞ。

一尾いれば、必ず二尾めがいる。三尾、四尾……。いる、絶対に！

私は無口になった。体が勝手に動き、淵から淵へと経巡った。確信の通り、いた、確かに。向こうから私の目の前に、ぼうっと浮かんでくることもあった。色の度合いは、個体によって違った。宝石店のショウウインドウに飾られる彫像のように、金ピカのものもいた。よくぞ、ドラードと名づけたものだ。

背びれを損傷している魚は一尾もいなかった。ただし、尾びれは、一尾ずつかなり傷ついていた。どうやら、ナワバリを作っていて、そのナワバリ争いは*熾烈をきわめるようだ。相手を追っていき、尾びれにパクリと噛みつくのだ。

私は、ここだと胸をおどらせた。大きな木が、真横に倒れ、淵に橋をかけた感じになっていた。倒木の真下は、木が倒れているので水流が変わったか、深くなっている。

そこでも、ドラードを一尾見つけた。

でも、待ってろ。いつか、帰ってこいよ。ここは、お前の住み家だよ。

私は、倒木の枝にへばりついた。足首を枝の根元にからめた。自分を、木の一部にした。

手を動かさない。指一本だって動かすものか。さあ、倒木になれ。化石になれ。

顔は水面。シュノーケルとは、*げに偉大なものである。ボンベを使った潜水と違い、泡一つ作らないで済む。

さあ、こい。お前も生きものだったら、必ず戻ってくるはずだ。

おい、ドラードよ。

かくて、一時間がたちまち過ぎた。

ピラプタンガが、幅の広い群れを作って泳いでいる。

尾に斑点があるタンバキー。おや、ここにはトクナレもいる。

ゆっくり頭を動かす。岸の近くには、尾の部分が赤いピラニアがいた。

二時間。

私は微動だにしなかった。待つ時は、待つ。待たねばならない。

そして！

ついに彼がやってきた。真下の深みから、胸びれを開き気味にして、ぬうっと浮かび上がってきた。

―こい。きてくれ。
私は石になっていた。しかし、胸の内には火のようなかたまりがあった。
次の一瞬。彼が浮かんだ。私の胸の前で、ぴたりと停まった。
―やあ。やあ。やあ。
私は、静かに涙を流した。
夢の時間が終わると、ディエゴが近づいてきた。
「おめでとう、ハタ。ぼく、ハタのこと、少し分かった気がしたよ」
「そうか。うん」
それ以上、何も言えなかった。

正月の休みのせいか、機内には家族連れが多かった。サンパウロ行きに乗りこみ、シートベルトをしめる。ディエゴは窓側の席、私の隣に座りかしこまっていた。
サテライトから滑走路。すぐにエンジンをふかし、上昇し始めた。
「有難う、ね」
私は、同行してくれた礼を言った。
「とんでもない。私こそ。こちらこそ役立たずが一緒にきて、ご迷惑をかけました」

「何を言うか。立派に助手の役をこなしてくれたよ。有難う。休みをふいにして悪かったな。それが心配」
「こんな経験、ハタとじゃなければ出来ませんよ。こちらこそ、有難う」
「恋人の方、大丈夫かな」
「ふふふ、大丈夫、大丈夫。ハタとの旅だと言ったら、それはいい、ぜひ行ってらっしゃいとすすめてくれました」
「美人で、やさしそうで、よかったね」
「ところでハタ」
「うん。なんだい」
「今度の旅、たくさんお金費ったじゃありませんか。ぼくまでついてきて。出費、五千ドルじゃきかなかったと思うけど。もとは取れるの？」
「もと……と言うと、そうか、無駄じゃないかと言いたいのかな」
「*ボニート。水の中はきれいだったけれど。それを見て、ドラードに並んで……、ぼくにはとうてい考えられない。高いと思う」
「ふん、高いか」
私は面喰らった。金のことなど考えもしなかったからだ。
「ね、ディエゴ。おれ、ちっとも考えなかったよ。経費のこと

など、これっぽっちも頭に浮かばなかったな。ドラードがいた。一つの淵で、同じドラードが戻ってきてくれた。それで充分。それで満足」

「しかし、普通の人では、それでペイしないと思います」

「そうかな。今度、ディエゴ、ピラニアとの関係が違ったろう。それは、これから一生続くと思うよ」

「……」

「おれはね、何かに熱中したら、可能な限り突きつめたいんだよ。あ、そうそう。君と行ったよね。『ファザーノ』。あのサンパウロ一のレストラン。そこで食べたじゃないか、トリュフを。うまかっただろう」

「おいしかったです」

「おれ、北イタリアの山の中まで、トリュフを堀りに行ったもの。そんな時、これがペイするかどうかなど考えないよ。それから、君が大学に行こうかどうしようかと迷った時、行きなさい、とすすめたものね。後に君が、人生の質が違ってくるのがよく分かりました、そう手紙をくれたね。嬉しかったよ。何でもそうだけど、そこに熱中出来るものがあるかどうかが決め手だよ。金のことなんぞ考えては駄目。ま、その内、分かるさ」

（畑正憲『生きるよ　ドンどん』による）

〔注〕

熾烈をきわめる ―― いきおいがあるさま。

げに ―― なるほど、実にという意味。

ボニート ―― ブラジルの観光地。

〔問題１〕　傍線部ア「「世界像」というものの基本構造」とありますが、基本構造が指し示す内容を十字で**文章１**から抜き出しなさい。

〔問題２〕　波線部「われわれは欲望をもっている」とありますが、**文章２**では欲望とはどのようなものであると表現されていますか。解答らんに書きなさい。

〔問題３〕　あなたは、これからの学校生活でどのように学んでいこうと思いますか。あなたの考えを四百字以上四百四十字以内で書きなさい。ただし、次の条件と下の〔**きまり**〕にしたがうこと。

条件

①　あなたが、**文章１**・**文章２**から読み取った考え方をふまえて、「学校」とはどのような場所であるかをまとめること。

②　「①」の内容と、自分はどのように学んでいくつもりかを関連させて書くこと。

③　適切に段落分けをして書くこと。

〔**きまり**〕

○題名は書きません。

○最初の行から書き始めます。

○各段落の最初の字は一字下げて書きます。

○行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。

○、や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じますめに書きます。（ますめの下に書いてもかまいません。）

○。と」が続く場合には、同じますめに書いてもかまいません。この場合、。」で一字と数えます。

○段落をかえたときの残りのますめは、字数として数えます。

○最後の段落の残りのますめは、字数として数えません。

（問題は以上です。）

このページ以降には問題はありません。

二〇二四年度　郁文館中学校

第一回　適性検査型入試

検査Ⅰ　解答用紙

1

※のらんには、記入しないこと。

〔問題1〕

〔問題2〕

〔問題3〕

受検番号

氏　名

※

440　400　300　200　100　20